

〈私立探偵ショー・シックスミス〉

1656

誰の罪でもなく

レジナルド・ヒル

三川基好訳



BORN GUILTY

A HAYAKAWA
POCKET MYSTERY BOOK

三 川 基 好
み かわ き よし

この本の型は、縦18.4センチ、横10.6センチのポケット・ブック判です。

1950年生 早稲田大学大学院修士課程修了
早稲田大学文学部助教授
英米文学翻訳家
訳書

『ハリーの探偵日記』アラン・ペドラザス

『手負いの森』G・M・フォード

(以上早川書房刊) 他多数

検 印

廃 止

^{だれ}^{つみ}
〔誰の罪でもなく〕

1997年11月20日印刷

1997年11月30日発行

著 者 レジナルド・ヒル

訳 者 三 川 基 好

発 行 者 早 川 浩

印 刷 所 岩城印刷株式会社

表紙印刷 大平舎美術印刷

製 本 所 株式会社川島製本所

発 行 所 株式会社 早 川 書 房

東京都千代田区神田多町2ノ2

電話 03-3252-3111 (大代表)

振替 00160-3-47799

〔乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい〕
〔送料小社負担にてお取りかえいたします〕

ISBN4-15-001656-9 C0297

Printed and bound in Japan

誰の罪でもなく

BORN GUILTY

江苏工业学院图书馆
藏书章



A HAYAKAWA
POCKET MYSTERY BOOK

日本語版翻訳権独占
早 川 書 房

© 1997 Hayakawa Publishing, Inc.

BORN GUILTY

by

REGINALD HILL

Copyright © 1995 by

REGINALD HILL

Translated by

KIYOSHI MIKAWA

First published 1997 in Japan by

HAYAKAWA PUBLISHING, INC.

This book is published in Japan by

arrangement with

A. P. WATT LIMITED

through THE ENGLISH AGENCY (JAPAN) LTD.

誰の罪でもなく

登場人物

ジョー・シックスミス	私立探偵
ガリーナ・ハッカー	共済組合の出納係
タラス・コヴァルコ	ガリーナの祖父
ダンカン（ダンク）・ドハティ	《ビューグル》紙記者
ウィリー・ウッドバイン	警視
ジョージナ・ウッドバイン	ウィリーの妻。中学の副校長
サリー・	
イーグルズフィールド	} 中学生
メイヴィス・ダルゲティ	
アンドルー・ダルゲティ	メイヴィスの父
ドーラ・キャルヴァリー	名家の未亡人
フレッド・キャルヴァリー	ドーラの息子
チェリル・ブッチャー	弁護士
マーヴィン・ゴライトリー	タクシー運転手
ベリル・ボディントン	看護婦
ミラベル	ジョーの伯母
ジョフリー・パーフィット	指揮者
ポット	} 牧師
ティモシー・キャニスター	
ディーン・フォートン	警官
チヴァーズ	部長刑事

すべては、ジョー・シックスミスが聖モンキー教会の横の小さな戸口からこつそり抜け出したところから始まった。

彼が聖モンキーにいたのは、ハイドンの《天地創造》のリハーサルがあつたからだ。

こつそり抜け出したのは、教会に着くなりミラベル伯母が執行吏のように彼の腕をむんずとつかみ、こう言つたからだ。『ジョゼフ、妙な噂を聞いたわよ』

ミスター・パーフェクトがじれったそうに指揮棒を打ち鳴らさなかつたら、彼はその場で厳しい尋問を受けることになつただろう。

伯母が聞いたという噂がどんなものなのか、ジョーは容易に想像できた。ガリーナ・ハツカーのことに違いない。四十過ぎて独身で、なおかつアルトでない者は妻を持つべきだと堅く信じている伯母なので、普通ならバリトンの甥が女性とつきあっていると知って喜んだはずだ。しかし今の場合、伯母が自分で選んだ花嫁候補ベリル・ボディントン（彼女は合唱団がそれぞれの位置につこうとしていたときに、ソプラノの一角から彼にそつと手を振っていた）に對抗馬が現われたというにとどまらず、ガリーナに関する噂を聞いたラシラス団地は、皇太子とシンブソン夫人の噂を聞いたランベス宮殿（（カンタベリー大主教のロンドン宮殿））のような騒ぎだつたことだろう。

ジョーは、つねに理性的とは言えないまでも、道理をわきまえた人間だから、自分が髪の毛をぴんぴんに立て、鼻にピアスをし、ノーブラで超ミニスカートの十七歳の少女とつきあっていると知つたら、伯母にとってはショックだろうと察した。しかし彼は説明しなければならぬとは思わなかつた。それどころかあらゆる手を使ってでも尋問を

のがれるべきだと思った。

もしボーリング・コーナー・コンサート聖歌隊が本拠地の教会で練習していたのだったら、彼に望みはなかっただろう。伯母はその角ばった建物のいくつもない出口のひとつひとつを、修道女の乳首よりもしつかりとガードしていただろうから。しかし、聖歌隊の評価が高まった結果、彼らはルートンへの勅許状授与五百周年を記念してサウス・ベッドフォードシャー交響楽団と聖モンキー教会合唱隊が行なうオラトリオの公演に参加するよう招かれたのだった。年寄りのメンバーたちが形だけの反対をしたが、ボーリング・コーナー聖歌隊は公演を聖モニカ教会（罰当たりのルートンっ子たちはもっぱら聖モンキーと呼んでいるのだ）で行なうという案に同意した。明らかにその方が有利な点が多かったのだ。会場の音響効果もいいし、街の中心地にあるし、より多くの聴衆を収容できた。そして、それほど明らかな事実ではなかったが、追い詰められた男にとつては何よりもありがたいことに、様々な脱出路があちこちにあった。

ジョーは最後の「アーメン」を待っていた。コントラルトの方に目をやると、ミラベル伯母はミスター・パーフェクト——つまり、指揮者のジョフリー・パーフィット——がかざす指揮棒を一心に見つめていた。指揮棒が振りおろされた瞬間、ジョーは一步あとずさりして、背後の自分より背の高い男たちの間に入りこもうとした。誰かの足のつま先を踏みつけ、苦痛に満ちた一オクターブ高い声があがった。

「ごーめん」ジョーは歌った。

それから彼はホイペット（グレイハウンドとテリ（アを交配した競走犬））のように逃げ出した。小さな付属礼拝堂の中に、外へ通じるドアがあるのが目についた。開くのかどうかわからない。しかしこういう場所で神に信頼が寄せられないなら、天国なんて何になるのだ？ ドアのところまで来ると、指揮者がこう言っているのが聞こえた。「まあ、悪くない。だが、まだまだ改善の余地があるな。今夜は冷えこんでいるから、暖かくして帰りなさい。喉をはらしたりしないように」

ジョーはドアのハンドルをつかんで、まわした。動かな

い。祈りを唱える。次の瞬間、彼は無事外の暗がりにはいた。

ミスター・パーフェクトの言う通りだった。空気は湿つて冷たかった。だがジョーはその空気をギネスの生を飲むように吸いこんだ。彼は最初無意識のうちに左へ行きそうになった。そちらは明るく照らされた聖モンキー・スクエアで、そこから目と鼻の先のヘグリットへに行けば本物のギネスにありつける。しかしそれは致命的な誤りだ。あの歳、あの図体なのに、ミラベル伯母は五十ヤードぐらいひとまたぎだ。ここは慎重のうえにも慎重にいかねければ。

彼は右を向いて、教会の背後の暗い墓地の方へ進んでいった。

勅許状を与えられてはいるが、ルートンには大聖堂がなかった。前世紀に裕福な市民たちが、この負い目を晴らすと、国で一番大きな教区教会を建てることをくわだてた。途中で資金が尽きてしまい、国内最大規模とまではいかなかったが、それでも大きな建物だ。ひとがわざわざ訪れようとはしないような場所ばかりを紹介した有名なシリーズ『迷える旅行者のガイド』には、聖モンキー教会は後期ビ

クトリア朝ゴシック建築の抑制のきいた奔放さの好例と書かれている。

ルートンの子供たちの大半がそうだが、ジョーも教会のイトスギを植えた敷地や、たくさんの控え壁の間の暗がり、初期の性的冒険の抑制のきいた奔放さを発揮する場としておおいに利用したものだった。しかし、それももう二十年前も前の話だ。その後、社会という機械の中に砂粒が入りこみ、文明はきしみ音を立てて回転速度を落としはじめた。

最初にやって来たのは麻薬中毒者たちだったが、彼らは連夜の警察の手入れによって、さらに奥深くの、さらによごれにまみれた、悪名高いスクラッチングズのような場所へと追いやられた。次が新顔のホームレスたち。商売の妨げになるといので、ショッピンングセンターの戸口という比較的暖い場所から追い払われた彼らが、段ボール箱をここへ移したのだった。また警察が乗り出し、その結果ティモシー・キャニスター牧師は、クリスチャンにふさわしい寛容の精神と、教会の信徒たちの大半を占める非寛容なク

リスチャンたちの要求との板挟みになって辛い思いをしたのだった。だが、西ゴート族のような風貌の、堂守りのヴィンセントにはそのような迷いはなかった。聖モンキーに段ボール箱を持ちこんで寝たりしたら、汚水をバケツで浴びせられてたたき起こされかねなかった。

それでも彼らはやってきた。社会が、助けの必要な者に助けを、希望を失った者に希望を与えないなら、そのような者たちはどこへ行ったらいいのか？

教会の外壁と墓地の間の敷石を敷いた暗い通路を慎重に歩きながら、ジョーはそんなことを考えていた。強い風が渦巻く雲の一角を吹き分け、ありがたいことに月の光が射した。その冷たい白い光の中で、少し先の、建物の角の巨大な控え壁の陰に、あのもの悲しい段ボール箱がひとつあるのが見えた。箱の前に立って身を屈めている者がいる。

ジョーはためらった。その憐れな人物の邪魔をするのはばかられたのだ。あえて堂守りの怒りにさらされる危険を犯すところまで追い詰められた者は、できるかぎりそつとしておいてやりたいではないか。ただ、その人物は箱に

入って寝る準備をしているようにには見えなかった。むしろ箱の中を探っているような……

突然強い光に目がくらみ、それ以上観察することができなかった。そして女がこう叫ぶのが聞こえた。「そのあなた！ そんなところで何をしているの？」

ジョーは片手をかざして光を避けようとした。懐中電灯の光が段ボール箱に向けられ、先ほどの人影が逃げ出すところが見えた。墓石の間を走り抜け、高い塀のところまで行くと、恐怖にかられた者ならではの身の軽さで乗り越えていった。

ふたたびまぶしい光が彼の目を貫いた。

「さあ、答えて。あなた誰？ ここで何をしているの？」女は問いただした。しかしそこには同時に自信なげな響きがあった。女の話し方は、ミラベル伯母の言うところの

「本物のレディ」のものだった。だが、ジョーが思うには、本物のレディたちが本物のレディ講座で最初に学ぶのは、暗い墓地で黒人の男に出会ったら一目散に逃げ出せということではないだろうか。

「ジョー・シックスミスといいます」彼は答え、ポケットからよれよれの名刺を取り出して光にかざして見せた。

「あら、まあ、探偵さんなの。仕事でここに？」

「いいえ。教会のリハーサルに出ていますして、近道して帰ろうと思っただけで……」

「わたしもよ」彼女は言った。「というか、聴いていたの。歌うのではなくて。そつと入っていつて、静かにすわっていたのよ。素晴らしい音楽ね」

「そうですね」ジョーは答えた。どんな状況下でもたわいのないおしゃべりを交わすことができるというのは、イギリスの上流階級の人々の賛嘆すべき特質だ。「あの、逃げていった男ですが……」

「そうそう。誰かしらね。あなた、よく顔を見た？」

「いいえ。よく見えませんでした。段ボール箱をめぐらしている手合いではないかと……」

「そうね。恐ろしいことよね」

具体的に何を恐ろしいと言っているのか、相手の口調からは判断できなかった。彼は続けて言った。「ただ、落ち

ぶれた人間にしては動きがすばしこかった。それに、あの男は箱の中に入ろうとしていたというよりも、中をのぞきこんでいるような様子だった」

「そう思う？ 箱の中を確かめてみた方がいいわね」

女は前に進んだ。懐中電灯の光が敷石から段ボール箱の側面へと上がっていく。かつてはアルフレード社製の冷凍冷蔵庫が入っていた箱だ。ジョーは、今その箱の中に何か入っているとしたら、それはまず白い冷蔵庫などではないだろうと警告しようかと思ったが、「本物のレディ」から懐中電灯を取り上げて自分が先に見ようとするなどともないと思い直した。

女は箱のところに行つて、中をのぞきこんだ。

「ああ、神様」彼女は言った。

そしてジョーも、彼女の隣に立つて中をのぞいた。中身は冷蔵庫ではないが白いという点は同じだった。

「おい、大丈夫か？」ジョーは尋ねた。

大丈夫なわけがなかった。しかし少なくともジョーがこの土地の言葉を完全にマスターしている証拠ではあった。

もしイギリス人の旅行者がキリストの受難の場に出くわしたら、まず言うことは「おい、大丈夫か？」だろうから。

返事はなかった。ジョーも返事を期待していたわけではなかった。箱の底に身を丸めて横たわっているのは男だった。金髪、薄いブラウンの目。若い。恐らく十五歳からせいぜい二十歳の間くらい。そしてこれ以上歳をとることはない。

そつと手をのばして、彼は自分の診断が正しいか確かめようとした。少年の左手は手の平を前に向けて肩のところに当てられていた。まるで挨拶しているようだ。別れの挨拶。親指の腹に何か書いてある。何桁かの番号が、真ん中の三桁の「二九二」以外は薄くなって読めなくなっている。強制収容所でしたように入れ墨してあるのではない。妙なことを連想して、ジョーは身震いした。

「死んでいるの？」じれったそうに女が尋ねた。

自分は手を触れるのを先のばしにしているだけだ、とジョーは思った。彼は思い切って手首をつかんだ。その冷たさだけで、すでにわかつていたことの裏づけとして十分だ

った。脈をとろうとしても時間の無駄だ。自分の時間の。少年ではなく。この子には無駄にしようにももう時間はない。

「そのようですね」彼は言った。

箱の中を照らしていた懐中電灯を女はいきなり引つこめ、胸に抱き抱えるようにしたので、彼は初めて相手の顔を見ることができた。四十代、しっかりした顔立ち、鼻はややわし鼻。イギリスの太陽のもとで暮らしたのではそうはならないだろうというほどに日焼けした肌。下から照らされて、その顔の方が箱の中の少年よりももっと死体のように見えた。ただし、彼女の間隔の狭い青い目は、強い知性の輝きを発していた。

「ひとを呼ばなければ。警察を、救急車を……」

「ええ、そうね。あなた、行ってきたらいい。あなたはそういうことには詳しいのだろうし、脚も速いし……」

「一緒に行きましょう」

「いいえ。わたしと一緒にでない方が速く歩けるわ。実を言うと、何だか足元がおぼつかないのよ。だんだんこたえて

きたみたいで……その箱の中の子……まだほんの子供でしょう？……わたしにも息子がいて……世の中どうなっているんでしょう？」

「たぶん、世も末なんでしょう」ジョーは言った。「わかりました。行ってきます。そこにすわっていてください。すぐに戻りますから」

涙を流す天使の石像の台座に女をすわらせて、ジョーは急いでその場を離れた。

教会の敷地内であつても ^{ゴッス・ロウ}「神の法則」と ^{ソッ}「仕方がないの。法則」は一字しか違わないのだから、当然のこととして、彼はちようどミラベル伯母が正面玄関から出てくるところに出くわすことになった。両脇に、ボイリング・コーナー教会のポット牧師と聖モニカ教会のティモシー・キャニスター牧師を従えている。

「どこに行っていたの、ジョー？」ふたりの聖職者を押しのけて、両手で甥をつかまえると彼女は叫んだ。「おまえに話があると言ったでしょう」

「今はだめ」ジョーは言った。「行かなければならないん

だ」

「おばさんと話をする時間もないって、どんな大事件なの？」まともに答えられはしまいという口調で、腹立たしげに彼女は尋ねた。

ひとつだけ答があつた。

「ひとが死んだんだ」ジョーは言った。「すみません、牧師さん。牧師館の電話を貸していただけますか？」

その晩はルートンの物騒な地域は閑散としていたらしい。ジョーが電話をかけ終えて牧師館から出てくると、もうパトカーが一台、サイレンを鳴らしてやってきた。

パトカーから降り立ったのは、ジョーの知らない元気いっぱいの顔つきの若い巡査と、彼の知っている丸顔の警官だった。

名前はディーン・フォートン。彼はシックスミス探偵事務所をウィンブルドン・サッカー・クラブよりも下に見ている。

「おまえ、こんなところで何をしているんだ？」ジョーが近づいていくと、彼はぶっきらぼうに言った。

「死体を発見したのはぼくなんだ」

「なるほど、そいつにつまづいたんだな」フォートンは言

った。「よかろう、見せてもらおうか」

彼はことの成り行きに大いに期待しているようだった。殺人現場に一番乗りとなれば、手柄をあげるチャンスだ。だが、死んだのがただのホームレスらしいとわかると、その熱意は急速に消え去った。

「余計な手間をかけさせやがって」彼は若い同僚に向かって言った。「なあ、サンディ、死人ははじめから箱に入って墓場にいるんだから、車からシャベルを持ってきて埋めちまえば、時間も手間もはぶけるってもんじゃないか」

「そんなわけにはいかないでしょう」若い警官は言った。スコットランド風の巻き舌の「が、かすかなふるえを帯びてことさら耳につく。恐らく彼が見おろしているのは、彼にとって初めての死体なのだろう、ジョーは思った。

「ああ、そうかい」フォートンは言った。「じゃあ、少なくともお嬢さんたちが来るまでは墓場荒らしを近寄らせないでおけよ」

墓場荒らしとは、ミラベルを先頭に集まってきているやじ馬のことだ。お嬢さんというのは、犯罪捜査課の連中の

ことだろう。フォートンは天使の石像の、前に差し出された腕に非常灯をつるした。『本物のレディ』は、その台座に腰をおろしてはいなかった。実際、どこにも姿が見えない。ジョーはそれほど驚きはしなかった。余計なことに関わり合いにならないというのは、イギリスの上流階級にとつては膝蓋腱反射のようなものだ。関わり合いの相手が、死んだホームレスと黒人の私立探偵とルートンの警官たち、場所が暗く寒い教会の墓地というのではなおさらだ。

『お嬢さんたち』はチヴァーズ部長刑事に率いられてやってきた。彼もジョーとは古くからの顔なじみだが、フォートンに劣らず彼を買っていないかった。ジョーは彼に死体を発見したいきさつをかいつまんで話した。話を簡単にするために、女のことは省略しておいた。ところが、そのすぐあとに当人が姿を現わして、ジョーは話をはしよった報いを受けることになった。

「あら」チヴァーズの質問に割りこんで彼女は言った。

「あなた、戻ってきたのね」

それはこつちの台詞だとジョーは思った。チヴァーズは

チヴァーズで自分がコケにされている気がした。「あんた、誰だね？」苛立たしげに彼は尋ねた。

彼女がチヴァーズに向けた目つきは、アフリカ人が力いっぱい投げた投げ槍をも押しとどめそうなものだった。ジョーの脳裏にそんなイメージが浮かんだのは、この女性が古き良き英国植民地のレディの生き残りに違いないと自分が感じていたからだ、彼はそのとき気づいた。彼女が着ている灰褐色のスカートとシャツは、サファリ風のファッションではなく現実のサファリに適した衣類なのだろう。しかし、それ以上の手がかりは彼女の肌の色合いだった。かつての大英帝国の沈まなかつた太陽に焼かれた肌に違いない。

チヴァーズに向かって、彼女は言った。「ちよつと黙っていてくださらない？ シックスミスさん、あなたが行ったあとで、助けを呼ぶならわたしの車の電話を使うのが一番早いと気づいたのです。それでクロイスターズまで行って、警察に電話しました」

聞いていたジョーにはいろいろなことがわかった。